

酒月米人小伝

KOBAYASHI, Fumiko / 小林, ふみ子

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

332

(終了ページ / End Page)

315

(発行年 / Year)

2005-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004159>

酒月米人小伝

法政大学キャリアデザイン学部専任講師

小林 ふみ子

はじめに

江戸の狂歌師酒月米人さかづきのこめとは、興隆期の天明狂歌に参入し、のち江戸狂歌の双璧の一となる四方歌垣こと鹿都部真顔の片腕として文化（一八〇三～一八一八）期にいたるまで活躍した。その活動期間の長さからしても、また四方側の有力判者という立場の重要性からしても、江戸狂歌研究が押さえるべき要の一人である。また天明（一七八一～一七八九）末年より狂歌壇と一定の距離をおいた江戸文芸界の大立者大田南畝が、寛政（一七八九～一八〇一）期以後も親しく交わった仲間の一人であり、南畝研究のためにも米人の伝と動向を把握する必要がある。本稿は、その米人の、江戸狂歌壇における重要性を考える基礎として、現在までに知り得た資料によって米人の略伝と狂歌壇において地位を確

立するまでの動向を整理することを目的とする。

一 略伝

米人にまとまった伝はなく、墓所も不明で諸書の記述を照らし合わせる他はない。生年、父祖等は未詳。南畝「花見の日記」（寛政三年、写）の注記によれば、榎本治右衛門。榎本の姓は三代目瀬川富三郎「江戸方角分」（文化末成年成、写）によっても確認できるが、同書は山田の姓も併記する。宿屋飯盛こと石川雅望編「狂歌画像作者部類」（文化八年刊）は山田姓で掲出する。狩野快庵「狂歌人名辞書」（広田書店、一九二八）・菅竹浦「近世狂歌史」（中西書房、一九三六）等以来、通称を治兵衛と伝えるが、現在のところ確認できない。

「判取帳」の南畝の注記によれば、天明三年当時、日本橋金吹町裏に住んだという。寛政三年の南畝「花見の日記」の時点では「深川江川橋」と記され、米人自身、後年寛政期を回想して「狂歌水篋集」（文化十一年序刊）に「おのれ深川に吾友軒をしめつれば」という。式亭三馬「狂歌髓」（享和三・一八〇三年刊）では「日

本橋青物町」の住所を示す。同じ享和三年七月五日に米人の霊岸島東港町の新宅へ招かれたことを、南畝がこの年の日録「細推物理」に記しており、『狂歌鑑』が上梓された正月から七月の間に日本橋から転居したと見られる。同じ時に南畝は米人が名を改めて扇屋三右衛門と称したことも記録するが、同じ通称を前月十九日の項でもすでに書き用いているので、改称の時期は、その前後という程度にゆるやかに考えるべきだろう。文化四年頃、南畝が「狂歌房米人霊岸島檜皮河岸にうつりすみけるに」の詞書きで七言一對の狂詩句と狂歌一首を詠んでいるので（『をみなへし』）、霊巖島内で転居を重ねたか。文化末年成立の『江戸方角分』はさらに「霊巖島塩町」の住所を記す。米人の浮世の渡世は知られていないが、もちろん町人であり、転居を重ねられるような身軽な職にあったのであろう。

米人の最期を記録したのも南畝である。狂歌集『紅梅集』（写）文政元年の項に次のような詞書きで三首を収める。

滝水米人、ひさしく行脚しかへらざりしが、こ
とし長月十九日、さぬきのくに普通寺村より備中

のくに玉島にわたらんとするに心地あしくつる
に普通寺村にて身まかれるよしをき、て

すなわち、文政元年九月十九日に讃岐で客死したという。墓所が知られないのもそのせいか。文化十一年頃の松本での活動が紹介されたように³³、晩年の米人は、狂歌を指導しながら各地を行脚したよう³⁴で、この四国の旅もその一環であつたろう。南畝の耳に届いたのが誤報でなければ、以後天保から幕末の狂歌集に見える「四方滝水」はその名を継いだ別人となる。

米人は、俳諧に遊んだ経験について自ら書き残す（寛政三年序「観難誌」³⁵）。ただ、葛飾派の素丸に師事したこと、鄭坡・宗瑞・柳門・英布といった人物と集つたことのみで、米人自身の俳号すら記さず、どの程度の活動であつたのか、今のところ一切未詳である。

二 天明狂歌壇へ——本町連の一員として

米人の狂歌界への参入は、江戸で狂歌人氣が沸騰した『万載狂歌集』刊行直後、つまり天明三年中のことと考えられる。天明二年以前の狂歌壇参入を否定する根拠は、天明二年十一月頃の南畝『江戸花海老』（刊）

330 (3) 酒月米人小伝

の江戸中の狂歌師名の羅列の中に見えないこと、また三年正月刊『万載狂歌集』に入集していないことの二点である。同三年三月十九日の恋川春町主催の日暮里狂歌大会の成果「狂歌知足振」で大屋裏住率いる「本丁連」に配列され、翌日も裏住・南畝らと潮干狩りに出かけたといひ（南畝「巴人集」、写）、ここで米人は狂歌壇に登場する。同じ三月の二十四日に開かれた南畝母の耳順賀を記念した作品集「老萊子」（同四年刊）にも、本町連の腹唐秋人、大屋裏住と並んで「屈米人」の表記で見える。南畝が知友の手を集めた「判取帳」への記入は、その配列より同年の四月頃。前述のように金吹町裏住まいで、大屋裏住の隣人であったことから、裏住に誘われて南畝の許で狂歌を始めたのである。「狂歌師細見」（同七月頃刊）⁵³でも「巴扇屋清吉」（つまり伯楽・本町連連合）の「一かど」とされる。本町連は南畝門下の狂歌連の一つで、その名の通り日本橋本町周辺を拠点とした。同じ南畝門にあった馬喰町付近の伯楽連とともに、町人を主体とした一団である。狂歌師酒月米人の出発はここにあった。

本町連は伯楽連と近い関係にあり、この三年四月

から十月までの月々の伯楽連主催の角力狂歌に米人がほぼ毎月参加したことが、その成果「狂歌角力草」⁵⁴（同四年刊）において確認できる。四月には、元木網門人の数寄屋連が実質的に主催した「宝合」会に、他の本町連仲間とともに客分として参加、「むば玉」なる宝を出品して（同四年刊「狂文宝合記」客品「むば玉の弁」）、「おこがましくもあつかましくもけふの連衆にづらなり平」と新参者らしく恐縮して見せる。この年には、落栗庵元木網の月並狂歌会の成果「落栗庵狂歌月並摺」にも入る。しかし、酒上不埒こと黄表紙作者恋川春町が主催した六月の「狂歌なよこしの祓」、七月の吉原の玉菊灯笼における狂歌会の成果「灯笼会集」、この年の夏狂言での團十郎の大星由良助初役を記念した「皆三舛扮戯大星」といった、秋人・裏住ら本町連の仲間も参加した催しの多くに見えず、本格的な活動は翌年以降のことになる。

天明四年の春興として、四方連傘下の諸連はそれぞれ黄表紙型の狂歌集を工夫したが、そのうち本町連の顔ぶれが多い「大木の生隈」⁵⁵に入集する。四年春夏の序跋をもつ南畝編「徳和歌後万載集」（同五年刊）、同年

末の序を冠した朱楽菅江編『狂言鶯蛙集』（同刊）の各二首は、四年中の米人の活動を示すものであろう。「徳和歌後万載集」巻一が収める、詞書きに飛鳥山のふもとの家の桜を詠んだという次の一首は、太田道灌の山吹の逸話で有名な『後拾遺和歌集』巻十八の兼明親王の歌「七重八重花は咲けども」を下敷きに、七、八、九（＝この）と数字を詠み込む遊戯的な詠法が、師南畝の詠風をよく学んだ作である（編者南畝の添削を経たからでもあろうか）。

七重八重こ、の家にも桜花かしこ山のあまり物かも

しかし、『徳和歌後万載集』『狂言鶯蛙集』の各二首というけして多くない入集歌数は、やはりいまだ初心者待遇でしかない。

翌五年春興の『四方春興夷歌連中双六』にも一首を載せ、天明五年八月の跋をもつ『俳優風』（同年刊）にも「四方」連中として参加して上々半白吉の位付けを得る等、ようやく幅広い活躍をみせるようになる。この年の南畝主催の月々の狂歌会の記録『下里巴人巻』（写）には、米人が八月・九月・十一月とその会に参加

したさまがうかがえる。それでも同十一月に狂歌壇の主要な顔ぶれ十六名を集めて葛屋が開催した百物語の狂歌会（『夷歌百鬼夜狂』）には加わっておらず、大勢の四方連中の一という位置付けを脱していない。

続いて天明六年の四方連春興『狂歌新玉集』に「本町連」の肩書きで入集、翌七年四方連春興『狂歌千里同風』にも入集、四方連の一員として定着する。この六、七年には狂歌壇の主だった顔ぶれ各五十、百人の肖像と代表歌を載せる『吾妻曲狂歌文庫』『古今狂歌袋』（ともに宿屋飯盛編）に入り、南畝編『狂歌才藏集』（同七年刊）になると入集歌数も八首と増す。とくに巻十四には次のような長歌・反歌形式の作を載せるなど、頭角をあらわしはじめる。

日本橋を過侍りて

すぐろくを ふり出しみれば おしろにぞ 霞は
か、れ 日本ばし まなく時なく ゆきかへり
みかへる田舎 ものまいり はるく、来ぬる 万
歳は まことにめでたう さぶらひにも かたを
ならべて ろく尺の こしをふる雨 ふく風も
かしこき御代の いにしへを ためしにひくや

あづさ弓 ふくろながらに 星霜を かさねぐ
も おありがたさよ

反歌

何事も思ひのま、に白砂のふじゆうのなき江戸の
真中

『万葉集』巻三の山部赤人の有名な田子の浦の長歌「あまのはらふりさけみれば」、およびその反歌「うちいでてみればましろにぞ」をもじり、また「古今和歌集」巻二十の「ふるきやまとまひのうた」の「ふる雪のまなくときなく」の表現を引用、『伊勢物語』や『古今集』巻九で知られる「かきつばた」の折句歌「はるばるきぬる」を在原業平から三河万歳に落して笑いを誘いながら、江戸城を背に絶えず人々が行き交う日本橋を詠じて賞賛する。「田舎ものまいり」（田舎者―物語）「めでたうさぶらひにも」（めでたう候―侍にも）といった破調や不自然な掛詞はあるものの、初心者から中堅の域に入りつつあった米人なりに狂歌壇の江戸賛美の雰囲気を受け止め、それを表現した作と評し得よう。この頃には、同七年二月に三囲神社に奉納された南畝・菅江ら主要狂歌師三十六名の狂歌を刻した額にも選ば

れるほどに⁶⁾、狂歌壇で一定の評価を得るに至る。

天明年間に米人がかかわった催しとしては、他に南畝「角田川に三船をうかぶる記」（真顔編「四方の留粕」文政二年刊）が記録する隅田川上の納涼狂詩狂歌会がある。その会の成果は伝わらず、唯一の資料である南畝の狂文によれば、書肆葛屋重三郎の主催で、南畝を判者に、狂詩を宿屋飯盛や紀定丸、腹唐秋人、算木有正、唐米三和、二歩只取、紀躬鹿、間屋酒船、狂歌を鹿都部真顔、馬場金埜、頭光、大屋裏住、山道高彦、浅藏森角、葛唐丸および米人、つまり南畝周辺の狂歌師連中各々八名で行われたという。年記はなく「水無月のあつさをさけんと」とあるのみで、天明四年の催しとされてきた⁷⁾。しかし、ここまでに見た米人の活動を鑑みて、四年の段階で米人がこころした顔ぶれにまじって活動し得る位置にあったとは考えがたく、五年以降のことと考えるべきであろう。狂歌の側とともに参加した浅藏森角も天明五年までの活動が確認できない人物であり、これを考え合わせ、また七年六月に松平定信が老中首座に着任して以降、南畝が活動を自粛した事実を勘案すれば、六年六月の開催を考えるのが

順当か。四方社中の数少ない狂詩作者の一であった辺越方人が見えないので、あるいは彼が七年二月に没した後、寛政の改革政治の開始間際の、天明七年の六月という推測も可能であろうか。

寛政初年頃の葛屋版狂歌絵本においては、『潮干のつと』『和歌夷』『狂月坊』（以上元年刊）、『普賢像』『銀世界』『百千鳥狂歌合』（以上、二年刊）などにもれなく入集し、米人は狂歌壇の重要人物の一人に数えられるまでになっている。数年ぶりに復活した伯楽連の角力狂歌会の成果『狂歌部領使』（寛政三年刊）にも積極的に参加して十三首の入集を見る。同じ伯楽連系でも浅草を中心とする人々の狂歌角力（寛政四年刊『狂歌四本柱』、同五年刊『狂歌太郎殿犬百首』）には参加していないが、本流の窪俊満主催の狂歌角力『狂歌上段集』（寛政五年刊）の会では、鹿都部真顔・紀定丸・大屋裏住・馬場金埒、および伯楽連首領の桑楊庵頭光とともに判者を務めるほどに、この頃にはすでに狂歌壇の実力者の一人となっていた。

三 数寄屋Ⅱ四方連中へ

寛政初年に狂歌壇のいわば中堅となった米人は、寛政半ばには数寄屋連の馬場金埒や鹿都部真顔との距離を縮め、数寄屋連すなわちのちの四方連の連中となつてゆく。『観難誌』（前出）に見えるように歌論歌学を重く見る米人の志向は、真顔の方針と合致し、まず当然の行動と言えよう。これはまた天明末年頃より大屋裏住・腹唐秋人ら本町連の活動が停滞したこと、真顔・金埒を中心とする数寄屋連中が、南畝等に接近することで狂歌壇における存在感を増し、ついに四方連の名を継いだことも関わっている。つまり元來四方連傘下の本町連の一員であった米人がそのまま四方連に残り、新たにやってきた数寄屋連中に吸収されたかたちとなった。南畝を中心とする旧四方連の主要狂歌師で、数寄屋連を母体とする寛政以後の四方連に残ったのは、米人を除けばほとんどいない。

米人が数寄屋連の狂歌集に入り始めるのは、真顔が四方姓を継承して数寄屋連が四方連となる寛政七年正月に先立つ同五年頃である。これ以前の数寄屋連の狂歌集、たとえば『狂歌すきや風呂』（天明八年刊）や

『あらたま集』（寛政三年刊）に米人の名は見えない。寛政五年正月刊行、真顔編『どうれ百人一首』は、近世期にもじり百人一首として広く親しまれた『どうけ百人一首』をさらに捻った書であるが、米人はこの最終丁巻軸の馬場金埒・烏亭焉馬に次ぐ重要な位置を占める（真顔は序と巻頭歌）。しかも、まさにその狂名にちなんで角樽を傍らに盃を戴いた肖像に添えて、さらに酒を詠む歌を載せたことは、米人の数寄屋連への本格的な仲間入りにあたっての顔見世のような意味あいさえ感じさせる。

うす霞ひきそめてより白ざけのさか屋にまがふ春
のあはゆき

『どうれ百人一首』に続いて、序に年末まで刊行が遅れたとする同年の春興『四方の巴流』寛政五年版でも、金埒の前に置かれ、その扱いは比較的重い。

この『四方の巴流』、また前述『狂歌上段集』あたりから米人は「吾友軒」の号を用い始める。これ以前、自筆本『観難誌』寛政三年付の自序に吾友軒を冠するが、刊本に見えるのはこの年が最初である。狂歌壇において堂・亭・庵号等の使用が流行し始めた時期であ

り、「ご勇健」の音をきかせた命名という（『吾友軒記』『観難誌』・享和三年刊『狂歌壇』）。続く寛政七年版『四方の巴流』ではついに「四方同盟判者」の列に並ぶに至る。

他方、もともと本町連と近しくともに活動してきた伯楽連は、本町連の活動の停滞をよそに独自の活動をすすめる、寛政五年春興『癸丑春帖』、また六年・七年兩年の春興『春の色』と、春ごとに春興集を刊行するが、そのいずれもが、米人を裏住、真顔や金埒同様に客分として遇する。この点からも米人が伯楽連の主流となる頭光や窪俊満らとは一線を画した立場にあったことがわかる。

台頭する数寄屋連中への接近は、一見、米人という人物の政治性を感じさせる。が、彼自身、狂歌判者が伯楽連と数寄屋Ⅱ四方連に分かれ、互いを批判し勢力を争う当代の狂歌壇に対して批判的であったようである⁽⁸⁾。すなわち、真顔の盟友馬場金埒と共編した『金撰狂歌集』（寛政八年刊）序文に次のように言う。

今の狂は忿戾にしていつはりおほしと。されば、
てにをはもたどくしきほどより、かのあそはく

はしきに過てかたくな、り、このうしはざえあまりて気のたらぬなど、腹ふくる、わざぐれいひの、しれば、かたみに党をたて肘をはりて、目に見えぬ心の鬼もひこづり出て我慢の角をふり、たけからぬもの、ふも猛くいさみて、野暮の正銘をあらはし、をとこそんなの中をもさまたげなんは、この頃我ともがらの風調にしてあらぬ道をもたどるなるべし。⁵⁹⁾

ただし、この批判は、同書の共編者金埒と近しく、唐衣橋洲編『二妙集』等他の狂歌集でも並んで入集するなどした米人が、狂歌壇の勢力争いをよそに「師と称せず我ま、にふるまふ」、つまり独立独歩で自己を貫くその金埒を称揚する文脈でなされた批判なので（といえ金埒は、狂歌壇ではあきらかに真顔の一派であるが）、多少割り引いて読む必要がある。それでも米人は、自身の編んだ『狂歌東来集』初編序（寛政十一年刊）に「初心不才とさみせらる、もすてず旧家名人とさたするをもたうとまず、たうとむところは歌がらと作意」と言い切ってもおり、狂歌作品そのものを重んじる一本気な性質であったのはたしかであろう。

寛政三年序、同八年までの記載が見える『観難誌』において、その米人の筆は、大御所南畝も菅江も懼れることなく、誉れ高い名歌にも種々の角度から批判を加える。たとえば天明狂歌を代表する南畝の名作「あなうなぎいづくの山のいもとせをさかれて後にみをこがすとは」に対してさえ「あなうは自にして、何国の山は他の噂なり。いもとせの山、吉野なり」と難癖をつけ、菅江の「思ひきや三百五十日あまりけふかあすかに年くれんとは」に「癡情をも捨べきならねど、あまりおろか過たり」という調子である。その序に「未練の僻論」と自ら卑下するように、実力に不相応な批評と一応は断った上で、しかし「常に狂歌を難」じ、「人よんで難陳屋」とまで言われても「疵とがめはおのれ生得」と開き直る点にもその直截な気質は窺えよう。南畝は、文化元年十月十六日付けで長崎から息定吉宛に出した書簡に「当地の人物は十千亭、錦江、真顔など、申風に御座候（中略）一体温潤游情にて、柳長、枇杷丸、米人など、申様なものは一切無之候」と記す。つまり温順な長崎人不在人柄の例として米人らが引き合いに出され、「温潤游情」とは正反対のまっすぐで

烈しい米人の気性を想像させる。

四 詠風と作法書の執筆

さて、こうして狂歌壇に地位を確立した米人の詠風と狂歌観を考えてみたい。「観難誌」は、狂歌の作品を個々に論じる点で貴重な作ではあるが、狂歌の不徳の招いた不幸を数え挙げる箇所を除けば、ほとんどが一首一首の表現の批評にとどまり、狂歌論になり得ていない。ここで注目したいのは、米人の狂歌作法書「狂歌ことのはぐさ」(享和元年刊)である。本書は、四季・恋・雑の部立て題を並べ、各題の題意を説明して頻用される表現を列挙した初心者向けの二巻二冊の小本である。巻頭に真顔の序を冠し、続いて米人自ら「初心意」と題して七丁に初心者の心構えを説く。夷曲・狂歌などの字義の解説から始めるあたりに意気込みは感じられるが、もとより体系的な狂歌論ではなく、初心者の留意すべき点を筆の赴くままに書き連ねた一文である。ここで「てにはも和歌に露たがふものなき」、つまり形式上、和歌と寸分違わない「狂歌の狂歌たるゆゑ」を次のように定義する。

上三句のうち、腰の句又は二の句にてもいかにも和歌によみえがたき荒涼なる詞一言もしくは二言もたち入て、下の二句のうちにも又たはれたる詞一言をつかひて、其余は高上にも幽玄にも和歌に立まさりてはなやかに仕たつるをむねとす。¹⁰⁾

つまり上の句・下の句に偏りなく、狂歌らしい戯れた言葉ないし平俗な表現を入れて詠むことだという。あくまで初心者に対する手ほどきではあるが、「狂歌の狂歌たるゆゑ」を発想や内容でなく、用語の次元で捉えることに注意したい。さらに次のような一節が続く。

狂歌に狂言なきをぬめりといひ、五句ながら平話にして雅言なきをたゞこと、いへり。それ狂歌は狂歌のよみ損ひにあらずといへども、趣意と、のひて狂言なきもの、和歌ならずして何ぞや。是和歌は神国の余風にして、ふかくおもひ入るときは、ざれたることば、こはぐ敷ことばなどはおのづからはおきけづりて、つひに上手なら俳諧歌、下手ならば力なき和歌ともなる事なり。しかるを和歌とていみさくるものかは。

狂歌を詠もうとする人に向けた説明であることを前提

に読まなければわかりにくいが、「狂言」つまり狂歌らしい表現を欠いて狂歌になり損ねた歌は、本来、和歌と呼ぶべきものではない。ただ「おもひ入」が深ければそうした狂歌的な表現が入らないこともある。それらは、和歌の長い伝統の力によって、和歌の一種としての「俳諧歌」、あるいは下手な和歌のようになる。趣意が通ってさえいれば和歌のようであっても構わない、と言うのである。さらに続けて、

おもひをのぶる心はひとつなればそれにてもくるしからじといへる人あり。これは外道の見にしてとるにたらずといへども、たとはゞ、未練の画工虎を糸がきて猫となるとも、はじめより猫をかきたるにはしくべからず。ふたつのさかひわきがたくは、ぬめりて狂言なからんより、むしろたゞことなれとはいふべし。和歌なれとはいふべからず。そのゆゑは荒涼に杜撰なりとも趣意だにと、のひ待らば、てにをはの字をくはへて狂歌にいたりやすし。

思いを表すのに狂歌でも和歌でも構わないというわけではない。が、狂歌を詠もうとしながら狂言を欠いて

和歌に似た中途半端な歌を詠むくらいなら、歌語・雅言とは言わないまでも、はじめから「ただごと」「平話」で趣意を整えて詠むべきである。そうすれば仕立て直して狂歌にできる、と言うのである。

「ただごと」を和歌と少しく別に考えている点、和歌と狂歌の価値の転倒など文学史に照らして特異な部分はあるが、元来、狂歌を志す初心者に向けた注意事項の非体系的な羅列の一部であり、その点に深い意味を汲み取る必要はあまりない。むしろ、記述が表現の次元に終始していること、内容については、発想のおかしみより「趣意」の整合を言うのみであることを重く見たい（「趣意」のありようについての記述もないが）。

この語彙・表現の重視は、題ごとの詞寄せである「狂歌ことのはぐさ」にふさわしい。しかし必ずしも同書の内容に合わせた作文ではなく、米人の狂歌論そのものをよく表すものようである。「観難誌」に見える米人の狂歌の批評の大半はこうした表現の問題の指摘である。米人自身が「狂歌ことのはぐさ」に引く、「観難誌」の批判を紹介しよう。ある時、次の一首を判者が高く評価した。

庭もせの萩にふすもなきものを鉄砲垣はきつい
用心

が、上の句が雅言で、下句にのみ俗語が入るのいか
かと難が付き、

庭のはぎにふす猪もなきを用心の鉄砲かきはなど
かまふらん

と直してよい狂歌になったという。「観難誌」に照らし
て、難癖を付けたのは米人自身、もとの詠者は頭光と
わかる。右のもとの狂歌は「狂歌部領使」に入集する
もので、判者は宿屋飯盛と真顔であった。米人は、「観
難誌」において近世初期の「古今夷曲集」の編者、生

白堂行風の言葉を引いて批判の理由を詳述、鉄砲・用
心といった俗語を上下に分けるべきだと主張する。行
風の権威を借りたこの批判は一見もつともらしいが、
初案にあった上の句と下の句の急激な落差が醸す勢い
とおかしみは、改案では失われ、米人の主張が適切か
どうかは疑わしい。しかし、米人はこの訂正後のかた
ちを、馬場金埒とともに秋の歌を輯めて上梓した「金
撰狂歌集」(前述)に収める。光は寛政八年三月に没し、
同年秋の「金撰狂歌集」の刊を見ていないので、この

改変を光が承引したのか定かでないが、共編者金埒の
目は通っているはずで、米人の独断で改めたとは思え
ない。

こうした「難陳屋」米人に対して反論が出された記
録もなく、いかにも正当とばかりに述べ立てる米人の
批判を容れざるを得なかった狂歌師は他にも多かった
ことであろう。少なくともこの「狂歌ことのはぐさ」
二巻二冊は、のち米人編著「増補狂歌題林抄」(文化二
年刊)四巻四冊のうち第三・四冊として序文・「初心意」
もろとも取り込まれ、文化十一年の再刷をも経て大量
に流布することになる³¹⁾。

その「増補狂歌題林抄」は、一条兼良の原撰を北村
季吟が増補して流布した「増補和歌題林抄」(宝永三・
一七〇六年刊)をもじった命名である(つまり原「狂
歌題林抄」はおそらく存在しない)。類題集に各題の題
意の解説と言葉寄せを併せた点は「増補和歌題林抄」
と同じであるが、前述の経緯で類題集と言葉寄せが別
冊で、それぞれに題意の解説があつて内容が重複する。
それでも江戸狂歌史上、便々館湖鯉鮒編「狂歌不卜集」
(文化元年刊)などとともにくく早期の類題集として画

期的な企画であつたとまずは評価できよう。

この書は類題集の体裁ではあるが、米人の自作も少なくない。これに米人の詠風を見てみよう。まず一首め、「蛙」の題で、諺「井の中の蛙」から発想する。

井のうちにすめる蛙の歌所ふかさもおよそ二条冷泉

蛙を『古今集』仮名序の通り、歌を詠むものとして歌所を出し、二条家・冷泉家の名を深さ二丈の井戸底の水(泉)の意に掛ける。次は「雲」の題で、有名な『古今和歌集』衣通姫の一首「くものふるまひかねてしるしも」の蜘蛛を雲に、「振る舞い」を饗応と読みかえる。

霧をのみかすみをくらうやま人に何をもてなすくものふるまひ

これら二首は諺や古歌などに発想を求め、その発想の連鎖や縁の言葉の範囲におかしみを求める点で、四方連の仲間の真顔らに近い詠風といえよう。次は各々「寄国祝」「思」。

入用の竹にはことをか、ずして虎のすまざる国ぞめでたき

うき人の顔にはたけはみへねども思ひの種をまか

ぬ日ぞなき

一首めは、「画題「竹に虎」のうち、日本に竹はあるが、虎は生息しないというだけの事実を、竹の有用性と虎の危険を挙げてあえてめでたいことと持ち上げる。二首めは、顔の「はたけ」(疥)を畑と掛けて「思ひの種」の語を取り合わせる。いずれも、縁語構成の成立のためには、ものを引き合いに出して一首を仕立てることでおかしみよりも理屈が先に立つ感は否めない。次の「老人」の一首のように、研ぎ・切れ・極め・錆と刀の縁語で綴りながら、智慧も錆び付きがちな老人の所在なさを嘆く意を通す巧みな詠もあることはある。

何をして身のときにせんきれものときはめかたなの翁さびては

たしかに、以上五首、いずれの詠も、先の「狂歌ことのはぐさ」「初心意」で米人が繰り返した主張したように「趣意」は整っている。が、下敷きにした諺や縁語構成の整合性のみが前面に出て説明的な「寄国祝」「思」の二首のもつ理屈くさは、自ら「難陳屋」を任じて多くの詠の表現の不整合をあげつらった米人の狂歌批評と一脈通じるものがある。

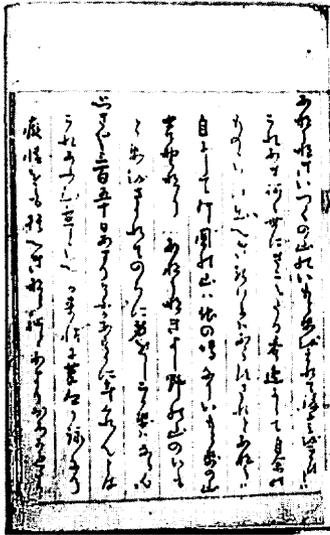


図1 米人自筆『親雑誌』1才・ウ (東京都立中央図書館蔵)

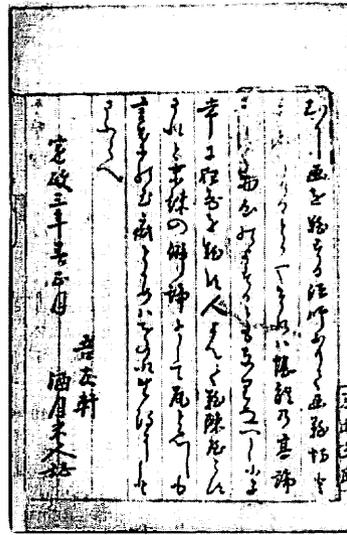


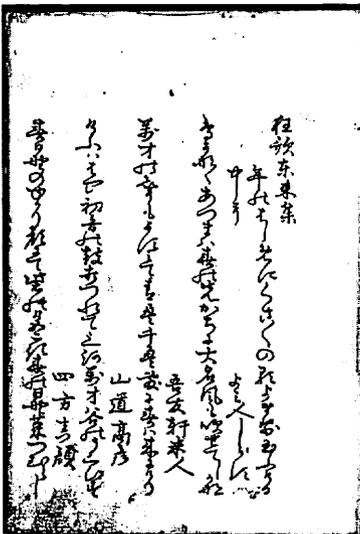
図2 米人編・版下『狂歌東来集』
初編序 (筆者架蔵)

文化期初頭にさしかかり、狂歌人口がいよいよ増える中で、狂歌判者にはよりいっそうわかりやすい指導が求められる時代であったはずである。その中で、初

心者向けの作法書「狂歌ことのはぐさ」「増補狂歌題林抄」を著し、抽象的な発想のおかしみを求めるよりも、具体的な語彙・表現の次元で道理を通すことをよしとする米人の行き方は、狂歌に入門する大衆の需要と合致したことであろう。その点で米人は狂歌の大衆化時代の判者の一典型といえる。

五 南歌流の筆跡と米人

米人の特徴ある筆跡は、比較的よく知られている。大東急記念文庫蔵の写本「ひともと草」の自筆に見えるように、寛政末年から享和頃には斜めに筆を引く佻



屈な書体が顕著になるが（後述図2参照）、寛政期の『観難誌』（図1）の段階では、南畝の筆跡に酷似する。米人を南畝流の書き手の一人とするのは筆者だけの認識ではない。たとえば梅本高節なる人物が著した『狂歌師伝』（近代写本、筑波大学蔵）でも米人の項に「師の筆跡を学んでよくした」とされ、また自身、蜀山流の手で知られた三村竹清も米人について「蜀山流の手をよく書て文宝亭を凌げり」とした（『判取帳筆者小伝』）。米人は、前述の南畝の『判取帳』に天明三年に記帳したが、この段階ではまったく別書体である。つまり、米人の南畝流の筆跡は、偶然の類似などではなく、その狂歌壇参入以後にあえて習得したものである。米人がこの筆跡で自ら版下を手がけている事実は注目される。『金撰狂歌集』跋に金埒が「吾友軒のあるじ禿たる筆をえらまずしてかいつくれば」と言い、米人編『狂歌東来集』（図2）の二編序に真顔が「吾友軒筆のあゆみの達者にまかせ」とするように、寛政半ば以後、これらの自著・共編著の版下は、筆跡からしてもまず間違いなく米人自身の筆である。問題はそれ以前である。南畝流版下は葛屋版を主とする狂歌本に天明

期より寛政半ばまで散見し、時期を考えてもすべてが天明末年に狂歌壇からの退隱の意志を示した南畝その人のものとは思えない。たんに南畝流の版下が流行したというだけのことかもしれない。しかし、南畝流を習得しつつあったこの米人の関与の可能性も追求すべきではないか。たとえば、唐衣橘洲による葛屋重三郎版の狂歌作法書『狂歌初心抄』（寛政二年刊）も、橘洲の自筆を生かした自序以外の本文はそうした南畝流の版下による狂歌本の一つであるが、右上から左下の次の文字へと続く斜めの線が際だつ米人の筆跡の特徴をもつこと、他ならぬ米人が序を寄せていることから、米人の版下と見てよい作品である。他にも金埒ら教寄屋連関係で金埒『猿百首』（刊年不明）、また『仙台百首』（寛政八年刊）⁽¹²⁾などの版下も顕著にも米人の筆跡の特徴を具える。後者には米人の序文があるので、ほぼ確実であろう。変わったところでは奇々羅金鶏の入銀物の家集『網雑魚』（刊年不明）の版下もそういった米人の筆跡の特徴をもつものの一つである。この点は今後さらに検討を重ねたい。

六 南畝との親交

米人は、南畝が狂歌連中との交わりを控えた寛政・享和期にあっても、南畝と親しく交わった狂歌師の一人である。米人の狂歌判者としての矜持が、本町連の一員として狂歌壇に参入して南畝に直接に師事した事実に支えられたことは、これまでの検討から容易に想像できる。その米人にとって南畝との親交は、外面的にも狂歌判者としての威信に関わる重要な意味を帯びていたはずである。

寛政十一年に「孝義録」編纂の命を拝してより、南畝が文章力の研鑽のために開いた「和文の会」は、その参加者の多くが南畝の狂歌仲間であった。米人ももれなく参加、四作を残して「ひともと草」(写)に収められている。その文章の一つには、この年九月の年記が具わる。米人の「狂歌東来集」は、寛政十二年正月刊の二編に「杏花園老人」の名で二首、享和元年二月序刊の三編に「覃」で一首、それぞれ和歌らしき南畝の詠を載せるほか、「よみ人しらず」「うし」などとして状況や歌の内容から南畝を思わせる作を初編(寛政十一年正月)から三編まで各一首ずつ収める⁽¹³⁾。また享

和三年は南畝の日録「細推物理」によって両者の交遊をつぶさに追うことができ、米人の登場は七回を数える。南畝が参加者を記録していない会でも、馬蘭亭山道高彦の狂歌会のように米人の列席が想定できるものもあり、両者の接触はもう少し多かるう。つまり、馬蘭亭・真顔・焉馬といったこの頃の南畝をめぐる交友圏の中に米人もある⁽¹⁴⁾。

米人は後に「四方滝水」を名のる。この号は、南畝の旧名「四方赤良」のもととなった流行語「鯛の味噌津で四方のあか」でもてはやされた「四方のあか」と新和泉町四方屋久兵衛の銘酒「四方滝水」を、そのまま狂号としたものである。この号は、当時四方歌垣と称した真顔率いる四方連の有力判者である事実を体現する。が、それ以上に南畝の直弟子であることを強調する意味も担っていたはずである。米人は「狂歌水篋集」(文化十一序刊)において二十余年以前の寛政期を回想し、その後「十とせばかりを過て師の旧号四方滝水を贈らる」という。滝水はもとより南畝の旧号そのものではないが、それにちなんだこの号は、実際に南畝から直に贈られたのであろう。

その改号の時期はいつか。文化六年の米人らの春興「四方山」(大英博物館蔵)において米人は「四方流水楼酒月米人」と名のつた後に、わざわざ「狂歌房もとのごとし」と注記することからして、これが「四方流水楼」の初の名のりと思しい。これに先だつて文化二年「増補狂歌題林抄」の頃より「狂歌房」を名のりはじめ、文化四年九月刊の米人編「月の都」(内題さらしな集、慶應義塾大学三田メディアセンター蔵)までは、狂歌房米人の名を用いていた。「四方山」には「流水楼」という省略形も見え、同じ年の山陽堂編「春興四方戯歌名尽」においても「流水楼米人」として入集、四方流水楼、流水楼、いずれの名のりも文化六年春頃からと見てよさそうである⁽¹⁵⁾。先の「狂歌水篋集」の「二十年余」「十年ばかり」も緩やかに考えれば、この贈号を文化六年、あるいはその前年文化五年末のことと考えるのに無理はない。

南畝の直系であることを端的に象徴するこの四方流水号を称した米人は、文化期の蜀山人時代に入っても多くの狂歌師連中とは一定の距離を保った南畝を、狂歌の世界に結びつける役割を担う人物の一人となる。

たとえば前述の「四方山」にも米人は南畝から次のような狂歌を貰い得ている。

鶯のはねだに色の麗しく妙音天のみや近く啼

遠桜山人 蜀山翁

妙音天は弁財天の別称で、この宮は羽田の弁財天。この文化六年が巳年であることに因んで載せられた一首で、前年の玉川巡視の際に南畝が詠んだもののようなある(「玉川余波」写、所収)。

まとめ

以上のように、米人は天明盛時の江戸狂歌を経験し、寛政・享和期の狂歌壇を支えた人物の一人であった。本稿では、続く文化期の活動まではつぶさに追いきれなかったが、米人には、初学書の執筆、地方行脚といった啓蒙的な側面が多分にあり、盟友真顔とともに狂歌の大衆化時代をにらんで江戸狂歌壇の有力判者として活動したと言えるだろう。

米人自身に即して言えば、天明期に遊びとして手を染めた狂歌が、最終的に各地を行脚してその教えを授けることで糊口の手段となった。さまざまな遊芸の教

授がそれ自体で職業となり得るようになった近世中期以後ならではの現象であり、かつ専門的・職業的狂歌判者の誕生という時代の流れに助けられた生き方であった。しかしそもそも俳諧より狂歌をとり、狂歌壇の時流に乗って四方連の主流をゆく狂歌師の一人となった人生の節目節目に米人の選択があるう。そうした近世人的キャリアアデザインの一例を、遊びと職業の均衡関係を考える素材と位置づけて本稿の結びとする。

※本文の引用に際し、大田南畝の作品は「大田南畝全集」(岩波書店、一九八五—二〇〇〇)により、狂歌は注記しない限り「江戸狂歌本選集」(東京堂出版、一九九八—二〇〇四)によって私に濁点、句読点を補った。

〔注〕

- (1) 中野三敏編「江戸方角分」(近世風俗研究会、一九七七)。
- (2) 濱田義一郎「蜀山人判取帳」補正(翻刻)〔大妻女子大学文学部紀要〕二号、一九七〇)による。
- (3) 鈴木俊幸「一九が町にやってきた」(高美書店、二〇〇一)七章。

- (4) 森川昭翻刻「観難誌」(濱田義一郎編「天文学」東京堂書店、一九七九)。
- (5) 石川了「狂歌師細見の人々」(長谷川強編「近世文学俯瞰」汲古書院、一九九七)参照。
- (6) 森銃三「朱楽菅江」(著作集)十三卷、もと「人物くさぐさ」、初出一九三三)が千坂廉斎「江戸一斑」(写)に見えるその記録を紹介した。
- (7) 粕谷宏紀「石川雅望研究」(角川書店、一九八五)天明四年頃など。
- (8) 拙稿「鹿都部真顔と数寄屋連」(「国語と国文学」七六卷八号、一九九九)で検証した。
- (9) 東京大学総合図書館蔵本による。
- (10) 上田市花月文庫蔵本(国文学研究資料館マイクロフィルム)による(以下同)。
- (11) 「狂歌ことのはぐさ」はじめ「夷曲楼」蔵版で、葛屋重三郎・西宮弥兵衛等五肆から出され、一肆が交替したのみでほぼ同じ五肆が「増補狂歌題林抄」を刊行する際に、目録・巻首・巻尾等の題を彫り変えてその第三・四冊に流用された(ただし真顔の序文の位置を第一冊へ移動する)。内題のある丁を別板に彫り直して「狂歌ことのはぐさ」も再刷された由、鈴木俊幸氏御示教。両書の諸版に

- ついては鈴木俊幸『葦重出版書目』（青裳堂書店、一九九八）参照。また「増補狂歌題林抄」が各地に流布したことは前掲鈴木「一九が町にやってきた」（注3）指摘。
- (12) 聖心女子大学・ソウル大学校・川口元氏蔵本が知られる。
- (13) 拙稿「寛政期の大田南畝と狂歌」（『近世文芸』八〇号、二〇〇四）で論じた。
- (14) 米人が咄の会に出席し、また三升連狂歌集に入集するなど、焉馬との関係については延広真治「烏亭焉馬年譜（五）」（『東京大学教養学部人文科学学科紀要』国漢研究室七一号、一九八〇）指摘。
- (15) 「滝水楼」の使用が文化六年からであることは、前掲鈴木「一九が町にやってきた」（注3）に指摘がある。

〔付記〕本稿は二〇〇四年度法政大学特別研究助成金の研究成果である。

本稿の執筆にあたって御垂教下さった鈴木俊幸氏、調査に際し、ご高配を賜った各所蔵機関、また図版掲載の許可を戴いた東京都立中央図書館に深謝申し上げます。